

駒場の火災の記録

平成10年(1998年)2月4日の夕刻、駒場1丁目15番地を中心に火災があった。22棟が被災し、うち10棟が全焼という東京では3年ぶりと言われる規模の火災だった。現在その跡地は防災公園となっているが、通行ができないため、その場所は周辺の人にしか知られていないと思う。

たまたまNHKがこの火災を防災のための番組として取材し、テレビで放送したことがある。その放送を録画された方からビデオを拝借することができたので、それを元に駒場の火災の記録の一つとして書き留めておく。この火災の記憶は多くの人がお持ちだろうから、そうした記憶を集めて記録とし、WEB上で誰もがみれる形で残す手がかりとなることを期待している。

この番組を見て分かったことは、火元に隣接する家の人たちがなかなか気付かなかったということだ。一昔前は火の見やぐらから常時消防署員が見ていたのだが、1973年6月から、東京消防庁では火の見やぐらの運用を休止している。したがって火災の第1報は119番への電話ということになる。火災の原因は不明と聞いているが、このときはどこかのマンションの住民からの通報で火災が消防署に伝わったのだ。

通報のあった時刻は午後5時55分。消防車6台が出動し、5分後の午後6時には到着した。最終的には23台が消火活動に当たったそうだ。しかしながら道幅が狭く、現場に消防車が近づくことはできなかった。南は淡島通りから、北は屋根の上からの放水になったという。実際に放水ができるようになるまで、かなりの時間を要したのだろう。30分後の6時30分には炎の勢いはますます強くなっていたということだ。火災の場所が消火活動に極めて不利な条件な場所だからやむを得なかったのかも知れない。

一番小型のポンプ車が入るには道路の幅が4メートル近く必要という。車が入ることができても、重装備の消防士がドアを開けて降り、ホース車を降ろして消防車の横を走らせるスペース必要だからだ。そんなことから進入できる道路は限定される。道幅があっても違法駐車があると障害になることもあるだろう。

そうして鎮火したのは4時間後のことだった。

NHKの番組で近所の人たちの体験談が紹介されたのだが、火災の初期にはなかなか気付かないものようだ。パチパチ、バリバリの音、台風の声、ヒョウが降るような音など、様々な聞こえ方があったようだが、すぐには火事ということは思い浮かばなかったそうだ。また、防音壁の工事をしていたということで、音も聞こえなかったというお宅も紹介された。

番組では住宅が密集しているだけに地域社会があり、声をかけたり1人暮らしのお年寄りを助けたりといったことも伝えられて、そうした近所づきあいが役に立ったとしていた。

鎮火まで4時間もかかる火災はなかなかない。悪条件の重なった不幸な事例ではあったと思う。しかしその悪条件がそれほど改善されているわけではない。その意味でも、駒場の火災は忘れてはならない地域社会の経験だろう。思い出したくないことかも知れないが、この火災があった事実を知らない人たちに伝えておくべきではないだろうか。

(2005年12月14日 管理人)